

曲目解説

Antiche danze ed arie per liuto Suite No.3,P.172

「リュートのための古風な舞曲とアリア」第三組曲

Ottorino Respighi (オットリーノ・レスピーギ) 作曲

平佐 修 編曲



レスピーギは1879年イタリアのポローニャに生まれ、1936年ローマで没した作曲家である。地元の音楽教師であった父からピアノとヴァイオリンの指導を受け、その後ポローニャ音楽院でヴァイオリン、ヴィオラ、作曲法、音楽史を学んだ。1900年にはロシア帝国劇場管弦楽団の首席ヴィオラ奏者としてペテルスブルグに渡り、そこでリムスキー=コルサコフと出会い、管弦楽法を学んだという。その後ベルリン滞在を経てイタリアに戻り、1913年ローマのサンタ・チェチーリア音楽院作曲科に教授として迎えられ、のちに院長に任ぜられている。

「リュートのための古風な舞曲とアリア」は、同音楽院教授を務めている間に、同図書館に所蔵されている古い時代の楽譜を研究した成果が基になっているといわれる。3曲ある同曲はいずれも16～17世紀のリュート曲を編曲したものであるが、第一、第二が管弦楽編曲であるのに対し、第三組曲は弦楽合奏向けの編曲となっている。より小編成であるが、典雅で気品漂う曲想が好まれ、3曲の中でもっともよく演奏される人気曲となっている。中でも第三楽章シチリアーナは、7～80年代にNHK-FM「FMクラシックアワー」のテーマ曲として使われていたことをご記憶の方もいらっしゃるであろう。また近年では、ジュピターなどクラシック曲のカバーを得意とする歌手平原綾香が、彼女自身の作詞による歌詞つきカバーバージョンを発表している。

- I. イタリアーナ 16世紀末のリュート曲からの編曲。いかにもルネサンス期のイタリアらしい明るく流麗な曲。
 - II. 宮廷のアリア 16世紀フランスのリュート奏者ベサールの曲集から6曲を編曲。曲想、テンポの変化が楽しい。
 - III. シチリアーナ 原曲は16世紀末のリュート曲。繊細で抒情的な旋律を変奏曲形式で彩った美しい名曲である。
 - IV. パッサカリア 17世紀後半のイタリアの作曲家ロンカッリの曲集による。重厚で壮大なスケールを感じさせる終曲。
- リュートはマンドリン属と同じ撥弦楽器（弦を弾いて音を出す）である。ヴァイオリン属に編曲されたものを、再び同じ発音原理の楽器にアレンジすることでどのような効果が生まれるか、お楽しみください。

Quando Parla il Tramonto!

Dino Berruti (ディーノ・ベルッティ) 作曲

前奏曲「黄昏語る時」

ベルッティは1893年8月31日イタリアのモンフェラートに生まれた。Dinoは通称でGiovanniが本名。カサーレで音楽教育を受け、弦楽・マンドリン合奏団の指揮者を務めた。神経質な人柄で、2、3年おきに発作のようなものが起きていた。1947年にその治療のため簡単な手術をすることになっていたが、この手術に極度の絶望感を覚えて手術の直前に自らの命を絶ってしまった。繊細で情緒に富んだ作風は、いかに感受性の豊かな作曲家であったかを物語っている。作品には1930年イル・プレット口誌主催の作曲コンクールで1位に入賞した「モスコーの真昼」や、本曲「黄昏語る時」。また、1936年には「ハンガリアの黄昏」が第1位に入賞している。

アマティ・マナンテ・ファルボ・ミラネージに続いてマンドリン界に清新の意気を吹き込んだ一人であり、カンタービレとテンポルバート、リズムと旋律の取扱いに対して新しい精彩を加え、浪漫的・幻想的な旋律はマンドリン本来の美しさを回想しつつ、更にそれを基とした新しい境地を描いている。この曲はチエルッティ領事という人物に献呈されている。

Die Fledermaus

Johann Strauss II (ヨハン・シュトラウス2世)作曲

喜歌劇「こうもり」序曲

小穴 雄一 編曲



ヨハン・シュトラウス2世は、音楽の都ウィーンを代表する作曲家で、その生涯の多くをウィーナ・ワルツの作曲に捧げたことから「ワルツ王」と称される。

「こうもり」は、レハールの「メリーウィドウ」と並ぶ喜歌劇（オペレッタ）を代表する作品である。通常、オペレッタが上演されることのないウィーン国立歌劇場で、毎年12月31日に必ず上演されるなど、オペレッタの中では別格の扱いを受けている「オペレッタの王様」的な作品といわれている。序曲は、オペレッタの中のいろいろな曲をつなぎ合わせて作られた、いわばショーケースのような構成となっているが、次々と現れてくる旋律とリズム（もちろんポルカやワルツ）のどれもが軽快で洒落、全編を通して浮き浮きするような高揚感に満ち溢れている。単独でも頻りに演奏されている人気曲で、ウィーンフィルのニューイヤーコンサートでも度々採り上げられてる他、コンサートにおけるアンコールピースとして演奏される機会も多い。1986年5月、今は亡き名指揮者カルロス・クライバーがバイエルン国立歌劇場管弦楽団を率いて来日したコンサートの最終公演で、アンコールに呼ばれてステージに戻り、客席に振り向きざま「Koumori!」の一言とともに始まったこの曲の疾走感を筆者は忘れられない。マンドリン属ならではの歯切れの良さを存分に生かした名編曲で、この名曲をお楽しみください。

音楽詩「柳河抄」(北原白秋のうたによせて)

鈴木 静一 作曲

鈴木静一は日本のマンドリン文化を作品の面で支えてきた最大の功労者である。1901年、東京生まれ。A.サルコリの前で声楽家を目指すも師の勧めで断念し、マンドリンを弾き始める。1924年、イタリアに渡る。途中シベリウスに会い才能を認められ作曲活動を開始。1927年、オルケスタ・シンフォニカ・タケイ 主催の第1回作曲コンクールに「空」が2位入賞した。処女作「山の印象」を発表後、多数の作品を発表したが、1936年、日本ビクター入社と共にマンドリン界から一時身を遠ざけた。1965年に復帰するまで、約450曲に及び映画音楽、流行歌の作曲を手掛け、商業音楽の世界で、頂点を極める活躍をした。黒沢明監督「姿三四郎」や“たんたんたぬきの〜”の替え歌で歌われた「煙草屋の娘」が有名。多くのマンドリン合奏曲、クラシックの編曲作品を発表すると同時に、数多くの学生マンドリンクラブの技術指導にも情熱を注ぎ、マンドリン音楽の繁栄に大いに貢献した。1980年5月27日、惜しまれながら永眠。

“私の近作について”

東京都 鈴木 静一

1969年10月

大正から昭和中期にかけ活躍した北原白秋の詩は、思春から青春に移ろうとする頃の私を異常に刺戟し、音楽と詩の両の選択に迷わされた思い出がある。その後、招かれて入社した日本ビクターで、白秋の詩によるゴンジャン〜マンジュシャゲなどの録音（作曲 山田耕筰氏）で北原氏に会い“灰色の樞”と彼自身が呼ぶ、柳川のたたずまいに就いていろいろお話を聞いた—その頃から私は柳川に制作欲を感じていたが1968年、九大MCに招かれ福岡を訪れた折、一日柳川に遊び、今日もなお、白秋の頃の面影を残す、晩秋の柳川の寂しさと深い詩情に溢れる、流れに、街に、また子供たちに云い知れぬ懐しさを抱き、この一編を書き上げたのである。最近の私は編成の増幅に駆りたてられがちであるが、この曲は純マンドリン楽とし、ただ“水落ち”の登りの叙景に一本のフルーツを加えた。さらに白秋の「我が生いたちの記」による散文詩の朗読を音楽の一部として組み入れたものである。

1971年6月30日発行 (岐阜マンドリンオーケストラ機関紙「フレット」第14巻・第2号(通号第58号))

【1】 流れ・・・私の郷里、柳川は水郷である。自然の風物はいかにも南国的であるが、柳川を貫通する数知れぬ掘割のほいには、日に日にすたれゆく古い時代の白壁が、今もお懐かしい影を映す。わが街に来る旅人は、その周囲の平野に、遠く近く、ろう銀の光をはなつ多くの河を見るであろう。歩むにつれその水面に菱の葉、蓮、真こも、河骨-さまざまの浮藻の強烈な更紗もようを見いだすであろう。水は清らかに流れて、すたれ果てたノスカイ屋（遊女屋）の厨の下を流れ、洗濯女のさらしにそそぎ、水門にせわれては黒いダリアの花に嘆き、酒造る水となり、汲水湯に立つ湯上りの娘の唇をそそぎ、そして夜は観音講の提燈の灯をちらつかせながら、海近き沖の端の塩川に落ちてゆく。水郷、柳川はささながら水に浮いた“灰色の柩”である。

【2】 恐れ・・・“あの眼の光るは、星か蛍か鶉の鳥か蛍ならば お手にとろ お星さまなら拝みましょ…”

幼い時、私はよくこういう子守唄を聞かされた。そして、恐ろしい夜に怯えながら、乳母の背から、首の赤い蛍を掴んだ時、どんなに好奇の心に震えたであろう。少年になっても私は夜が怖かった。何故にこんな明るい昼のあとから“夜”という厭な恐ろしいものがくるのか？ 私は乳母の背に抱きついて震えたものだ。真夜中の時計の音は、また妄想にしばれた。トンカ・ジョーンの小さな頭脳に生肝とりの血のついた足音を刻みつけながら、時々深い奈落に引き込むようにホーンと時をうつ… “あの眼の光るは、星か蛍か鶉の鳥か 蛍ならば お手にとろ お星さまなら拝みましょ…”

【3】 水落ち・・・九月十日---祇園会が終わり秋もふけて、線香を乾かす家、からし油をしぼる店、ローソクを造る娘、提燈の絵をかく義太夫の師匠---すべてがしんみりとした物の哀れを知る十月の末には、まず秋祭りの準備として柳川の掘割は、水を干され、魚は捌われ、なまくさい水草もどぶ泥もきれいにさらい尽くされる。

この“水落ち”の楽しさは町の子供の何にも代え難い季節の華である。そうして、このひと騒ぎのあとから、また久しぶりに綺麗な水は廃れゆく町に注ぎ入り、楽しい祭りの前ぶれが奇妙な道化師の姿で笛をならし、拍子木を打ち、町から町へとめぐり歩く。祭りのあとの寂しさは、また格別である。野は火のような樫の紅葉に百舌がただ啼きしきるばかり、何処からとなく漂流うて来た人形師の肩で、生白い人形の首が眉を振る物凄さも何時か人々の記憶からかき消えて“灰色の柩”柳川に寂しい、寂しい冬が来る。

組曲「鐘の港」

鈴木 静一 作曲

私は1934年頃、長崎を訪れた思い出があるが、作曲を思い立ったのは、最近「九大」の招きで福岡に行った時である。その時或る人にそれを計ったところ、古い記憶だけで書くことを薦められた。理由は、今日の長崎の変容だった。これは、痛ましい原爆を知らない—現代文化の手の届かなかった大戦以前の長崎—今よりもっと異境のイメージの濃かった長崎の思い出なのである。(1972 May 鈴木静一 記)

I—海を渡るアンチェラスの鐘（稲佐にて）

秋だった 目の下に拡がる 港の向こうに あの異人館や唐風の寺 そして 壮麗な2つの天主堂が ひときわめだつ
長崎の街が 秋空の下に息づいていた さっきまで 足下の造船所からの ハンマーの騒音は いつか消え
海に 街に 夕暮れが忍びよっていた 右の天主堂(大浦)だろう 鐘の音が起こった それに 誘われるように 左の
(浦上)方から 鐘の音が・・・あ々！ アンチェラス鐘！ ふたつの鐘は互いに
響きを交わし 安息の夜を迎えようとし 街には 灯かけが またたき始める—

II—プロムナードと喋々夫人の幻想

次の日は 音もなく 降り注ぐ 秋雨に明けた 古めかしい しかし それが なんとも

懐かしい電車の走る 街を 散歩する — 出島 — 眼鏡橋 — 唐風の寺院
蘭館と呼ばれる オランダ風の古い洋館 — 私は強い異国情緒 溢れる 街のたすまいに酔い
あてもなくさまよう 踏んでゆく濡れた石畳の道は オランダ坂 そして美しいサンタマリアがやさしく手を さしの
べる 天主堂 — やがて 私は 街と海を見おろす庭園の中に 八葉の屋根をいただいた 異人屋敷を見つける
まるで待ちかまえていたよう ひとつのメロディーが高く耳に溢れた！ ブッチーニのオペラ “蝶々夫人” の（或る晴
れたる日に）だった

Ⅲ—遠い祭りと祭りの街

今朝も 稲佐の山路を歩く 静かだった — 毎日 響き渡っていた 造船所のハンマーの音が無い —
その静かさの彼方から 微に 笛や鉦 太鼓の音が海を渡って来ていた — そうだ！ 今日 諏訪神社のお祭り
お宮日！ 唐人行列 — オランダ漫才 — 船御興 — それから 中国の竜頭籠からとった 蛇踊り — 長崎の工
キゾティカは頂点に達する！ 何十年も見なれた筈の人達まで 気を昂ぶらせ はやしたてる！ 祭りの街は たのし
い喧騒に ふくれあがっていた

鈴木静一と出会ったあそこ

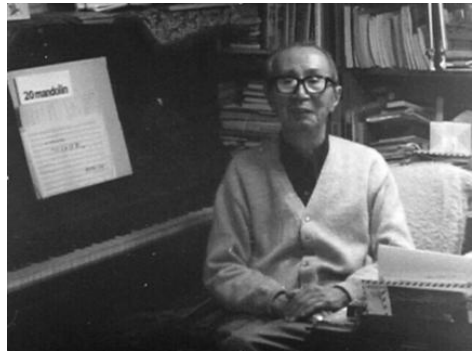
松永恒一

1968年の夏、当時大学の1年生であった私は、所属していたマンドリンクラブの上級生が演奏する交響詩「北夷」を間近で聴き、度肝を抜かれた。鈴木静一の音楽との出会いである。その冒頭の濃霧の描写—薄暗いホールに漂うPPの2度の和音—にたちまち北の大地へ引き込まれる思いがし、以来音楽にとっぷり浸かる学生生活を送ることとなる。その年は「スペイン第2組曲」「細川ガラシャ」そして「失われた都」など、鈴木静一の音楽世界に圧倒され続けた。

初めて鈴木静一本人を見たのは、その翌年、九州大学マンドリンクラブの定期演奏会場だったが、多くの学生が次々とあいさつに訪れ、直接話をする機会は得られなかった。そして大学3年の夏休み。マンドリンクラブ員の友人と2人で上京する機会があり、その場の勢いで突然「鈴木静一に会いに行こう」となったのである。住所も何もわからない。東京駅で公衆電話の電話帳を繰ると「鈴木静一」が2人いた。片方に「鈴木静一(音楽)」とある。「これだ」とそのままダイヤルしてしまった。電話に出た女性に山口大学マンドリンクラブであることを告げる。そして、しばらく待つと受話器から「もしもし」としわがれた声が出た。さて、緊張の度合いが一気に上がる。こちらの氏名はなんとか伝えたものの後が続かない。鈴木静一の自宅にいきなり電話をし、勝手に押しかけて行っているものか。なんと切り出せばいいのか。私がしどろもどろになっていると先方からあっさり言ってくれた。「あ、来る?」。拍子抜けするほど気さくな印象だった。

そのあと「東京駅からなら山手線に乗って渋谷で井の頭線に乗り換えて…」と道案内までしていただいた。自宅に到着し、仕事部屋に通される。ピアノがありレコード、テープ、書籍などが山積みされ、マンドリンオーケストラの写真がいっくつか飾られた薄暗い部屋だった。その後、その部屋には何度か訪れる機会を得たが、あるとき古い演奏会のパンフレットを探し出し、見せてくれたことがある。そこには「チゴイナーワイゼン— マンドリン独奏 鈴木静一」と記されていた。そして本人自らマンドリンを持ち出している昔話となった。戦時中の日本の映画音楽の話もあった。レッドパーズの話も出た。激動の時代を職業作曲家として乗り切り、その後マンドリン音楽に戻ってきたこの音楽家の生き方に、血気盛んな頃の私は大いに感銘を受けたものだ。今から社会に出ようとする自分は、本当は何をしたいのか、との自問を込めて。

卒業後、何度か会う機会があり、ある日の演奏会場でこう言われた。「やる気があるならやってみないか。コムラードマンドリンアンサンブルという合奏団がある。」人生の転機だった。人は、いつ、誰に出会うかで人生の岐路を作る。そして、出会いの機会を作るのは他ならぬ自分自身なのだ。了



仕事部屋の鈴木静一（筆者撮影）